



永 い 狂 気

中村真一郎

永
い
狂
気

昭和三十五年二月二十五日 印刷
昭和三十五年二月二十九日 発行

定 価 二 百 七 十 円

著 者 中 村 真 一 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

東京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 東 京 (3 4 1) 代 表 (七 一 一)
振 替 東 京 八 〇 〇 一 一 五 番

乱丁・落丁のものはお取替えいたします

〔印刷・塚田印刷 製本・神田加藤製本〕
© S. Nakamura Printed in Japan

目

次

永い狂気

……七

碎かれた夢

……四九

城への道

……七五

昔がたり

……九九

音楽喜劇

………
一三二

ある出会

………
一四七

三面鏡

………
一七一

時を巡る星

………
一八九

装
幀

高

木

雅

章

永
い
狂
気

永
い
狂
気

これは終りのない物語である。

男が女と知り合った時、男には妻があり、女には夫があった。そして、はじめに女を男に押しつけたのは、男の妻であった。

その経緯は次のようなものである。――

男が結婚した時、妻はまだ十八歳だった。大学を卒業した年の暮に、戦争がはじまったので、男の親たちは息子を早く妻帯させ、そして、息子が出征する前に、孫を――家の後継者を得たいと考えた。男はひとり息子だったのである。

そこで、男の父親は同じ会社の同僚の娘に目をつけた。その娘はまだ女学生だった。防空頭巾をかぶったまま、会社へ父に面会に来た、娘のはきはきした動作、子供らしい純真な眼差し、が、男の父親を感動させた。父親は廊下で、その娘に呼びとめられて、彼の同僚の名前を口にするのを聞いた瞬間、これは息子の嫁になる、と思った。その父親の心の動きは、それ自身、ほとんど恋愛感情に似ていた、と云ってもいいだろう。彼はその娘を自分の身近に置きたい

と、無意識の間に望んだわけだ。

その日、会社が退けて帰る途中で、男の父親は、早速、その同僚に、意中を打ち明けた。同僚も直ちに喜んで賛成した。同僚の方では、その春、優秀な成績で学校を出たばかりの男に就いては、父親から絶えず自慢話を聞かされていたし、それに子煩悩の父親は、会社の社員慰安旅行などにも、独り息子を伴うことがあって、既に男とは顔見知りだった。

その上、同僚は娘ばかりを何人も持った男やもめで、停年までには何とかして、その娘たちを結婚させなくては、と、そればかりを苦にしていたところであった。だから、父親の相談に、待ち受けていたように乗った。戦争になってからは、次第に早婚の風潮になってきたし、結婚の仕度も、諸事簡略になってきていたから、明日にでも、仮の式を挙げていい、と云う口ぶりだった。それに、男がいつ召集されるか知れないし、それによって、この話が解消になってしまうおそれもあったのだ。

が、話が早く進みすぎたことが、却って、男の父親に常識を取り戻させた。彼は娘の間もない卒業まで待つてから、挙式しようと提案した。それまでのふた月ばかりを交際期間とするところが、子供たちの将来にとってもいいだろう、と云うのが、穏当な、その日の結論となった。

父親は、同僚が古ぼけた鞆をかかえ、寒そうに肩をかかめて降りて行くのを、電車のなかから見送りながら、さて、今の話を、どう息子に切り出し、どう納得させようか、と考えた。

が、思いどうまでもなく、その日の夕食の食卓で息子も直ぐ賛成した。寧ろ、躊躇したのは母親の方だった。母親は、何でも親の云いなりに従順に従う息子が、可哀そうだ、と感じた

のである。大学に入る時だって、あれほど当人の望んでいた文科へ進まずに、父親の主張する経済科へ行ったのだ。が、息子は、その進学の件だけでなく、大概の時に、実は母親の気持に沿うように考えて行動しているのだとは、母親の方では気がついていなかった。結局、母親も次の日曜に、同僚に伴われて訪ねてきたその娘を見た時には、やはり、夫の選択は間違っていないかった、と思った。

そのようにして、やがてひと組の若い夫婦ができ上った。が、両親の希望のように、直ぐに子供はできなかった。いつ出征するか判らぬ男は、後のことを考えて、子供を作らないことに決めていた。それに、この可愛らしい、子供らしい眼付きの新妻は、実は女性としての発育が遅れていた。

そこへ起ったのが、応召ではなくて、男の咯血だった。男の勤めていた或る公団は、次つぎと若い働き手を軍隊に奪われて、この真面目で小心な男が、自分の職場の仕事を殆んどひとりで背負いこむような形になった。過労が男の肺を傷やぶった。

当分の間、兵隊にとられる心配はなくなったが、その代り、絶対安静ということになり、その当分の間、戦争が済むまで続いた。

やがて戦争が終り、男の勤めていた公団は解散した。男の母は死に、めっきり年とった父親ひとり、一家の支え手となった。そのうちに、思いもかけぬことに、妻は妊娠した。それまでも、生理的な不調が、屢しばあったので、油断しているうちに、子供ができていたのである。

しかし、栄養の不足と過労とが、買出し先の田舎で、妻を流産させることになった。そして、

その後の処置の充分できないまま、帰宅したことが、妻を今度は長い病院生活に送りこむことになった。

幸いに、男の方は大分、健康が恢復していた。そこで父親と共に、男も働くことになった。戦後の貨幣価値の変動は、父親の一生の蓄財を、殆んど無に帰していたし、妻の入院は、不時の支出を要求した。

その後の一年ばかりは、男にとっては夢中の間に過ぎた。父親も死に、男ははじめて、一人前の男として、社会人として、生きなくてはならなくなったのである。その時になって、男は今迄、自分がいかに忠実で従順な独り息子であったかと、反省した。家庭内の模範的な子供は、行動の基準を、凡て両親に求めていた。今、両親が世を去った後でも、何かにつけて、父ならどうするだろうと云う考えが、自分自身の好みや判断より先に来ると言うことが、ひとり立ちしなくてはならなくなった男の足をためらわせた。それが、男の自信を失わせた。

妻が退院してきた。閑さえあれば、だるそうに横になってばかりいる妻との、ふたりきりの静かな生活がはじまった。男にとっても妻にとっても、はじめての結婚生活らしい生活だった。どちらも親の云いなりに夫婦になったのだから、燃えるような情熱を経験した訳ではなかったが、このふたりだけの生活というのは、静かな味のある愉しみを与えた。ふたりは同じその愉しさのなかで、お互いに仲のいい夫婦だと信じた。平凡な心の平安が、ふたりの小心な人間には、一番、柄にあった暮しかただった。

男が勤めに出た後で、妻は、一日置きに、病院へホルモン注射に通う他は、茶の間で婦人雑

誌などを開いていた。戦後の人間解放の風潮は、雑誌のなかでも婦人の自覚を求め、政治的視野の獲得を説いていた。しかし、妻には、それは要するに、活字のうえのことだとは思われなかった。彼女の處まじしい心は、天下国家の問題を、直接、自分の日常生活に繋げるといふ操作を、大それた冒険だという風に判断した。同性のなかの勇敢で利口な人たちが、彼女の代りにやってくれさえすれば、それでよかった。彼女には、夫だけで沢山だった。

が、その夫にさえ、自分は充分に尽していないのではないか。——と謙遜な彼女は考えるようになった。婦人雑誌の女性の地位の向上への関心は、政治の面だけでなく、性の面でも、大胆な解説を行うようになっていた。その雑誌が、毎号、繰り返し説くところによれば、性は生活のなかの例外的な瞬間だけに問題となるものでなく、人間としての中心的な重要事、それを無視しては、結婚もなりたたない大事だった。彼女は性の問題がこれほどクローズ・アップされることに、羞恥は感じなかった。(科学的なグラフ付きの説明などを眼にして、恥かしがるのは、寧ろ、男の方だった。)彼女は未知の世界の説明にただ驚いた。驚いただけで、それもやはり活字のうえのことだとしか感じられなかった。結婚後数年、もともと発育の遅れていた彼女は、性的な要求にうながされて、夫を誘ったと云う経験もないし、夫の方でも極めて淡泊だった。彼女は男性というものは、間歇的に排出の欲望を感じるものだと思っていて、それを受けるのが、妻の勤めだと思いこんでおり、その勤めにも、間もなく慣れてからは、日常生活では、そのことは忘れていた。丁度、夫の髭を剃る習慣を意識しないでいられるように。——ところが婦人雑誌や、どうかすると、新聞の家庭欄でも、性の重要性を強調している。それは日に日

に、深刻な表現をもって、強く迫ってくる。

彼女は遂に、こう考えるに至った。自分はそうした要求を感じないが、そして、特に、手術の後では、そうしたことは、問題となり得ないが、自分の愛する夫は、多分、そうしたブラトニックな夫婦関係に不満を感じているだろう。それを口にしないのは、夫が自分を哀れんでいるからで、そのような遠慮を夫にさせては気の毒だ。——婦人雑誌の記事の、女性解放のための勧告は、この善良な妻には、逆効果を与えてしまった。

或日、妻は例の婦人雑誌で、ある医者の恐るべき文章を読んだ。それは男性の欲求不満が、彼を社会生活のうえでも自信を喪失させ、落伍者としてしまふ、と云う意見である。医学博士の権威を疑うことを知らない妻は、本当に恐ろしくなった。夫の日頃の引っこみ思案に、思い当るところがあったのである。善良な妻は、夫に至急、女友達を与えなければならぬと決心した。

彼女の決心は真剣だった。しかし、自分の知らない世界についての彼女の決心の内容は、結局、空想的だった。彼女は（勿論、夫が自分で女友達などを見付けることはできないだろうから）誰かいい人を夫に推薦し、その人に頼んで、夫を映画につれて行ったり、食事を共にしたり、要するに話相手になってもらおう、と云う考えだった。欲求不満を直接、性の行為に結びつけるのは、彼女の想像力には荷が勝ちすぎた。肉の問題は、心の問題に置き換えなければ、彼女には理解できなかった。

しかし、相手に選ぶのは、誰がいいだろう。自分の生涯を委ねる夫の選択さえ、父親に任せ